

岐阜大学の活力(いぶき)を地域から世界へ発信する広報誌

岐大の いぶき

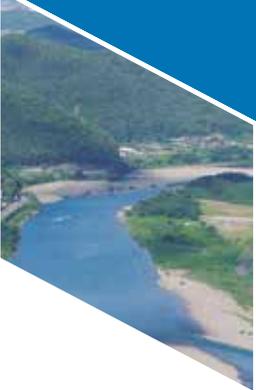
2024
Spring-Summer No. 47

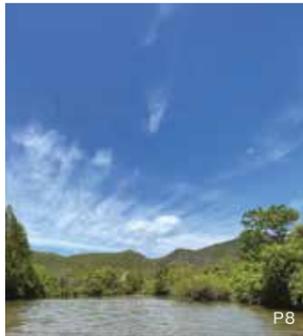
学び 究め 貢献する



LOCAL SDGs

自然環境と共生し、
持続可能な地域社会を
築くために
今、私たちにできること。





岐阜大学の活力(いぶき)を地域から世界へ発信する広報誌

岐大の いぶき

2024
Spring-Summer No.47

published by



04-11 【特集】LOCAL SDGs

持続可能な地域社会を築くためステークホルダーから声とデータを集め多様かつ複雑な問題解決を目指す

岐阜大学環境社会共生体研究センター 原田 守啓 准教授
岐阜大学応用生物科学部 大西 健夫 教授
岐阜大学環境社会共生体研究センター 斎藤 琢 准教授
岐阜大学環境社会共生体研究センター センター長 村岡 裕由 教授

学生主体の生物多様性保全・自然再生プロジェクト
鶴ヶ池自然再生プロジェクト

岐阜大学環境サークル Gamet

硬水は噴霧化によって軟化できることを発見

岐阜大学教育学部家政教育講座 久保 和弘 教授

12-13 先輩の声

時には喧嘩もできる仲間を作ることが大事。
意見をぶつけるからこそ拓ける世界がある。

岐阜県農政部長 足立 葉子 さん
1988年 農学部農学科卒業

14-15 岐大で生まれるもの。最先端研究の現場。

若年成人男性の脂肪肝と「食行動の偏り」の関連性を明らかに。
早期治療を超えた早期予防につなげたい。

岐阜大学 保健管理センター センター長 山本 真由美 教授
医学部附属病院 糖尿病代謝内科
岐阜大学 保健管理センター 非常勤講師 三輪 貴生 臨床助教
大学院医学系研究科内科学講座 消化器内科学分野 (第一内科)
岐阜大学 保健管理センター 田尻下 聡子 助教
医学部附属病院 消化器内科

16-17 いまを駆ける!岐大生FACE

全ての人が多様性を認め合い安心して過ごせる
社会を目指して、今自分ができていることをやりたいです。

岐阜大学地域科学部 地域文化学科 4年 ゆいんくる 代表 加藤 みのり さん

18-19 ひらけ!授業の扉

社会システム経営学環 観光デザイン実習
地域資源を生かした観光振興策を立案。
1年半の実習を通して、観光学での学びを深める。

岐阜大学 社会システム経営学環 三井 栄 教授

20-21 Topics 岐阜大学の取り組み Nov.2023→Apr.2024

22 岐阜大学基金

特集

LOCAL SDGs

地域の多様な資源を最大限に活用しながら、
自ら課題を解決し続けられる自立・分散型社会を目指す
「地域循環共生圏 (LOCAL SDGs)」構想が注目を集めています。

これは世界的なムーブメントである
SDGs (持続可能な開発目標) を地域起点で考えていくもの。

その実現には、私たちの暮らしを支えている
森・里・川・海といった自然環境を維持・回復することが不可欠です。

人類が自然環境と共生し、持続的な社会を築くために何ができるか。
今号では、それぞれの理想を掲げ活動する教員や学生の取り組みを紹介します。



持続可能な地域社会を築くため ステークホルダーから声とデータを集め 多様かつ複雑な問題解決を目指す

本学と岐阜県森林研究所、岐阜県水産研究所、国立環境研究所の共同研究課題「長良川流域における森・里・川の気候変動適応が中山間地域の生業の持続性とウェルビーイングに与える影響の研究」。少子高齢化や地域格差などの社会問題ともリンクする、複雑化する環境問題解決のための取り組みについて、包括的な研究を進める教員の声をお届けします。

長良川流域における森・里・川の気候変動適応が 中山間地域の生業の持続性とウェルビーイングに与える影響の研究

サブテーマ 01

森・里班

気候変動下の森林管理・中山間地農業が長良川システムと炭素循環に与える影響



サブテーマ 02

川・アユ班

気候変動適応策としての河川環境管理・水産資源管理・持続可能な観光を支える科学的知見創出



サブテーマ 03

なりわい・Well-being班

適応シナリオが生態系の恵みに関わる生業の持続可能性とウェルビーイングに与える影響



環境問題を地球規模から地域規模に落とし込み、 多くの方が身近な課題として考えられる土台を 各分野の研究者が協力して築いていきたい。

気候変動影響を地域視点で捉え 全体像を明らかにすることが重要

地球温暖化による気候変動は、人類共通の課題です。実際、日本の平均気温は過去100年で約1.3℃上昇しました。では、岐阜県の平均気温はというと、過去100年で約1.8℃上昇しており、温暖化が全国平均よりも進行していることは意外と知られていません。海外と国内で状況が違いうように、日本の中でも地域の状況に即した温暖化対策が必要です。岐阜県と岐阜大学は「岐阜県気候変動適応センター」を令和2年4月に共同で設置し、気候変動への適応策を実行する判断材料や基準を科学的見地から見出すための共同研究に取り組んできました。令和2年度から4年度にかけて環境研究総合推進費の支援を受けて取り組んだ「水防災・農地・河川生態系・産業への複合的な気候変動影響と適応策の研究」では、気象や水、森林、農林水産業、社会システムなどさまざまな分野の研究者が集結し、多様な視点から温暖化の影響を明らかにすることで、

地方自治体や現場で働くプレイヤーなどと協働して適応策を検討できる体制づくりを目指しました。

これまでの研究を通して明らかになったことの一つとして、長良川のシンボルであるアユにも気温上昇の影響が顕著に及び始めていることが分かりました。温暖化は河川の水温も上昇させており、夏季の温水時には、岐阜市を流れる区間の水温がアユの生息に適する上限の26℃を超え、アユは水温がより低い上流へと生息範囲を移していました。秋の産卵時期も確実に後ろ倒しになっており、温暖化の影響はアユの生活史全体に及んでいることがわかりました。また同時に、長良川に流れ込む吉田川や板取川などの自然豊かな支流から比較的水温の低い水が本流に流れ込んで長良川の水温上昇を和らげていることがわかりました。

データをとるだけでなく、生業に直結する漁師さんからも聞き取りを行いました。漁師さん自身も近年の温暖化の影響を感じていましたが、上流と下流では感じている影響が大きく違いました。漁師さんは自

分の持ち場のことは詳しくても、他の地域については知る由がないため、流域全体で何が起きているのかは分かっていませんでした。私たちは上流から下流までデータと実際の声を集め、より大局的な分析を試みた結果、流域全体で起きている温暖化影響を明らかにすることができました。

こうした現地調査の過程で、これまで行政機関や行政の試験研究機関が業務のために記録し、蓄積してきたさまざまなデータが、気候変動や生態系の変化といった環境変動の分析にとっても役立つこともわかりました。これらの一つ一つの調査や分析は地道な作業ではありますが、私たちの身の回りに起こってきた環境の変化の全体像を解明する上で、行政が保有しているデータは貴重な分析材料になります。さらに、これらの調査や分析結果をオープンにすることも重要です。より多くの関係者が共通認識を持つことで、それぞれの視点から対策を考えることができ、新たな一步を踏み出すことができるためです。



岐阜大学環境社会共生体研究センター
原田 守啓 准教授



岐阜大学応用生物科学部
大西 健夫 教授



岐阜大学環境社会共生体研究センター
斎藤 琢 准教授

地域住民の幸福度にも着目 文理融合の環境科学研究拠点へ

3年間に及んだ「水防災・農地・河川生態系・産業への複合的な気候変動影響と適応策の研究」での成果をふまえ令和5年度からスタートしたプロジェクトが「長良川流域における森・里・川の気候変動適応が中山間地域の生業の持続性とウェルビーイングに与える影響の研究」。これまでに構築した気候変動適応の知見やデータをもとに、行政・研究者・地域が協働して、より具体的な適応策の創出を図っています。

プロジェクトは「森・里班」「川・アユ班」「なりわい・Well-being班」の3班で領域を分担して取り組んでいます。今回、森や里について研究を進めているのは、戦後の拡大造林政策によって植樹した木々が伐採期を迎え、伐採後に再び造林するか、違った活用をするかの方向性を決める必要があるため。また、森と水、そして川は非常に密接な関係があるからです。こちらについては、岐阜大学高山試験地のスギ林における炭素吸収量データ、岐阜県や郡上市が保有する森林モニタリングデータなどを活用しながら、モデルシミュレーションによる森林炭素吸収量の現状診断・将来予測を進めてい

す。また、下呂市にある応用生物科学部の演習林などを活用して、地球上の水のサイクルを扱う分野である水文学の観点から森林の種類についても考察を進めています。例えば、スギやヒノキを植林された一帯と落葉広葉樹二次林とでは、洪水緩和機能や水源かん養機能に差が出るのか。また、地下水の水温や水質、水量にどのような違いが表れるのかといった具合です。これまでに水温に着目した研究例が少なかったこともあり、こちらについてもシミュレーションが進めば、一定の仮定をもとに県内全体の将来予測モデルの構築が可能になると考えています。

そして、自然科学的なアプローチだけでなく人文社会学的観点から、人々の暮らしにフォーカスしている点もこのプロジェクトの特徴です。こうした研究を始めたのは、例え有効な対応策が立案されたとしても、その担い手となる地域住民の幸福度が高まるような方向性でなければ、その対応策も実行に移されないだろうと考えたためです。具体的には、自然環境の豊かさや気候変動が人々の生業や精神的・社会的な充足感へどのように影響しているのかを調査しはじめています。例として、都市部から長良川の中上流域に移住し、生き生きと暮らしている人も

いれば、当初思い描いていた移住にならなかった人もいます。現段階では、移住者の幸福度は自然の恵みの実感や地域コミュニティでの人とのつながりなどに比例するといったいくつかの仮説を検証しているところです。こうした調査や考察を得意としている社会システム経営学環の教員陣と学問領域を横断した議論をするとともに、地域で暮らす人々の共感が得られるような研究活動を展開していきたいと考えています。

地域に根差した岐阜大学だからこそ、大学も地域社会を構成するプレーヤーの一員として、自治体や関係機関、事業者、市民と持続的な協力関係が築けるのだと思います。一方で、地球温暖化や生物多様性に関わるグローバルな環境課題解決に向けて、研究者がどのように貢献できるのかという問いに対する回答を、この地域での実践を通じて国内外に示すことができると考えています。

地球温暖化と聞くと、スケールが大きい話のようにも聞こえますが、地域規模にスケールを落とし込むことが重要です。そうすることで、地域の環境課題と社会課題との関係性が理解でき、大学の研究活動が地域の環境課題や社会課題を解決する力になると考えています。

2024年4月設置

高等研究院 環境社会共生体 研究センターとは？

岐阜大学はこれまでに培った環境研究分野の成果を発展させ、課題解決策の共創を推進するために、流域圏科学研究センター、高等研究院地域環境変動適応研究センター、高等研究院脱炭素・環境エネルギー研究連携支援センターの融合・発展的改組を実施し、「高等研究院環境社会共生体研究センター」を設置しました。センター長を務める村岡教授に話を伺いました。



岐阜大学環境社会共生体研究センター
センター長 村岡 裕由 教授

「環境社会共生体研究センター」は、地球温暖化の緩和や気候変動への適応、生態系サービスの持続可能な利活用といった地域での地球規模環境課題への対応に必要な専門知・科学知を包括的にステークホルダーに提示し、解決策を共創していきます。これまで流域圏科学研究センターなどの多くの研究者が環境分野での研究と人材育成を推進しており、森林生態系や水資源管理に関する知見を蓄積してきました。しかし、自然環境や環境資源に関する基礎研究から課題解決策を創出する課題解決型研究までをシームレスに展開することが必要になってきました。それがセンター設立に至った背景です。

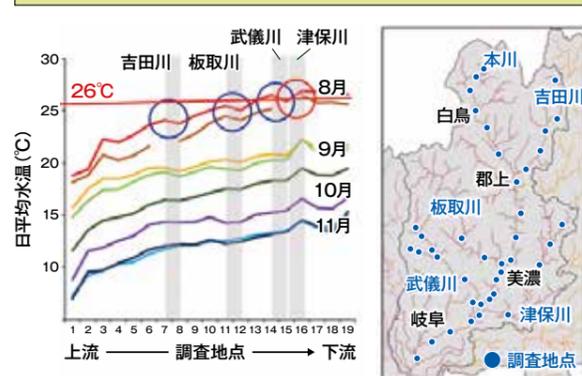
日本は水や森など自然が豊かなため地球環境問題の影響がわかりにく

いかもしれませんが、温暖化に伴う河川生態系の変化、森林の二酸化炭素の吸収能力の変化、農作物への影響など、多くの課題があります。私たちは「流域圏」という自然と社会が密接に関係し合うシステムを包括的に診断する手法の開発や、地域社会と環境の関わりを示すデータの発掘や分析、環境変動影響の将来予測などの研究を通じて、ステークホルダーと協力して持続可能な地域社会を共創していきたいと考えています。

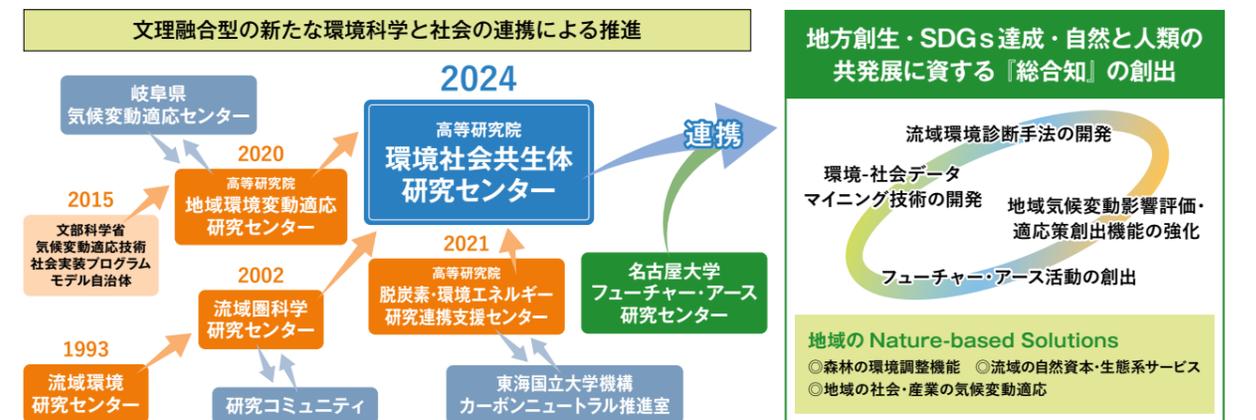
私たちの暮らしや経済活動は健全な自然環境に支えられて成り立っています。持続可能な社会を実現していくためには、人と自然が共発展する関係を再構築しなければなりません。そのような思いをセンター名の「共生体」に込めました。また、

地域の環境課題は、人口の変化や経済、カーボンニュートラルなどの社会課題とも関係します。これらの課題に取り組むためには、学内の英知を集結し、文理融合型の包括的な研究を推進する必要があります。そこで当センターでは「環境資源研究領域」「環境変動適応研究領域」「社会システム研究領域」「脱炭素・環境エネルギー研究連携支援室」の4つの分野を立ち上げました。さらに、東海国立大学機構における環境分野の取組を進めるために、名古屋大学フューチャー・アース研究センターとも連携します。新しいセンターが環境分野における知の拠点となるような研究・人材育成・社会連携・国際連携など広範な活動を展開していく所存です。

支流からの豊富な冷たい水で長良川が冷やされている！



- 「水防災・農地・河川生態系・産業への複合的な気候変動影響と適応策の研究」で調査した長良川の水温。冷たい支流が流れ込むことで本流の水温上昇が抑えられていることが分かった。
- 岐阜大学高山試験地にあるスギ林。20年近く前から炭素吸収量を計測している。

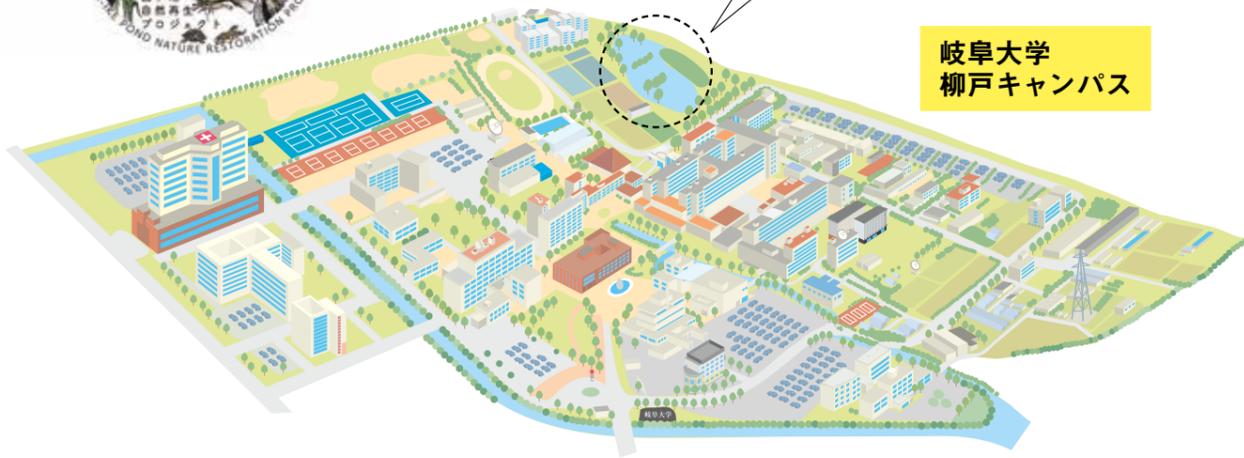




岐阜大学自然保存地 鶺鴒池

岐阜大学キャンパス移転時の自然保護活動が契機となって、昭和50年に「自然保存地」に指定された約2万㎡の池。トウカイヨシノボリをはじめとする貴重な動植物が生息し、岐阜市最大のカモ類の飛来地として知られている。

岐阜大学 柳戸キャンパス



特集 学生主体の生物多様性保全・自然再生プロジェクト

鶺鴒池自然再生プロジェクト

岐阜大学の敷地内にある鶺鴒池。かつては、水生植物が生育し、多数の野鳥が飛来していましたが、半世紀近く放置されていたため、湿地的環境の劣化と生物多様性の低下が進行しています。環境への問題意識を高く持ち、自然再生に取り組む学生に話を伺いました。



岐阜大学環境サークル ジャメット G-amet

平成30年に有志によって設立されたサークル。学生が主体となって環境の課題について取り組み、多くの人の環境に対する意識を向上させることを目標としている。活動理念は「わたしたちからできること。」、令和6年2月現在は18名が所属。



「鶺鴒池自然再生プロジェクト」は、岐阜大学の敷地内にある鶺鴒池に水鳥「バン」が戻ってくるような環境づくりを目的としたプロジェクトです。サークル活動の一環として、4、5年ほどかけて現地を調査し、自然環境の劣化と生物多様性の低下の仕組みを研究してきました。現在は、調査結果をもとに効果的な再生方策を検討し、人工的な復元作業を段階的に実施しているところです。

そもそもプロジェクトが始まったのは、サークルの創設メンバーが講義を受けた際に池の存在を知り、調べていく中で問題意識が芽生えたのがきっかけ。歴史をさかのぼると、もともと鶺鴒池周辺は湿地帯で、バンの集団繁殖地だったようです。その後、1970年代に入り、集中豪雨や岐阜大学の移転工事に伴って生態環境が大きく変化。加えて、外来生物の侵入や水質の悪化も重なって、バンの姿は消えてしまいました。以後、半世紀近く放置され、学生や教員の認知度も低下する一方でした。

当サークルは「わたしたちからできること。」を活動理念としており、鶺鴒池の自然再生は学生だからこそできることだと考えています。社会人や企業などが主体になるとマネタイズなどを考える必要があると思いますが、私たちは比較的自由な時間がありますし、動植物や環境問題について考えることはシンプルに楽しいです。サークルには互いに刺激し合えるメンバーが集まっていて、毎週の定例会を楽しみにしています。

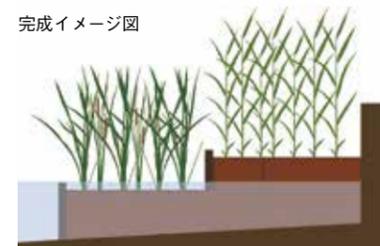
また、本プロジェクトでは、鶺鴒池を含む岐阜大学柳戸キャンパスを1つの実験場に見立て、学生や地域の方が多様な生物に触れるとともに、環境保全のための知見を



5年間ほどかけて鶺鴒池の水質や周辺に生育する動植物について調査を行ってきた。サークルとしては、文系・理系の枠を超えた分野横断的な検討を目指している。



完成イメージ図



エコトーン試験造成

鶺鴒池に小規模な実験区を設置。抽水植物の生育場所の再生が、人工的にエコトーンを造成することによって可能か検証している。

身につけた人材を育成する場になることを目指しています。私たちも調査研究の手法や科学的知見に基づいた保全方策を学ぶことにもつながっていて、楽しみながら知識と経験を蓄積できています。“百聞は一見に如かず”といわれるように、環境学習も実際に見て触れることが大切だと思いますので、生物多様性の保全に取り組むとともに、調査研究の場を守っていきたいです。

加えて、私たちが大事だと考えているのが、プロジェクトを学内外の協力者と協働して進めていくこと。やはり、自分たちだけでは視野が狭く、専門知識も不足していますので、専門家の協力が不可欠。そして、さまざまな立場の方と関わっていく中で、鶺鴒池に関心を持つ人のコミュニティを広げていきたいからです。そのために活動内容をオープンにして、SNSやWEBサイトで発信をしています。少しずつではありますが、学内や他大学のサークルからも認知されるようになってきましたので、引き続き活動を積極的に発信していきたいです。

昨年度からはエコトーンの造成を始めました。エコトーンとは、陸域と水域の境界になる水際環境のこと。水の深さや土の水分条件がゆるやかに変わっていく場所があることで生物の多様性が生まれます。かつて存在した多くのエコトーンは失われましたが、人工的に移行帯をつくることで、新たな湖沼・湿地生態系を創出できるはず。水底に根を張り、バンなど水鳥の住み家となる抽水植物が増えてれば、彼らにとって心地よい場所になると思いますので、地道にこのプロジェクトを続けていきたいと思っています。

特集

硬水は噴霧化によって軟化できることを発見

岐阜大学教育学部の久保和弘教授は、株式会社TKS（本社：岐阜県岐阜市）との共同研究で、硬水を噴霧化処理することで軟化できることを発見しました。この技術を用いると低コストかつ容易に硬水の軟化ができるため、高い汎用性が期待されています。

健康リスク低減につながる水の軟化方法を発見

私たちが普段口にしている水は、その硬度によって「硬水」と「軟水」に分類されます。硬度とは、水1,000ml中に含まれるカルシウムイオンとマグネシウムイオンの量のこと。硬度の高い硬水を日常的に使用することは、カルシウム過剰摂取による前立腺がんの発症リスク増加や、配管内での無

機塩類（主に炭酸カルシウム）の析出量増加など、多くの問題を引き起こします。

日本では総じて軟水が産出されますが、欧州や北米には多くの硬水地域があります。そこではしばしば水の軟化処理が行われていますが、処理のための設備投資のコストや専門的保守が必要なことなどの課題があります。しかし私たちは今回、硬水を噴霧化するだけで軟化できることを発見しまし

た。安価かつ容易に軟化できることが明らかとなり、さまざまな可能性が広がりました。

視点を変えることで得た新たな可能性

今回の研究は、超微細な気泡が出るシャワーヘッドの開発などで知られる株式会社TKSから、ウルトラファインバブルの機能特性を応用して、何か新しいことができないかと相談があったことが始まりです。平成26年からさまざまな検討を重ねましたが、失敗の連続でなかなか成果が出ませんでした。

転機となったのは、令和3年に当時大学院生だった春見真柚^{かすみまゆ}さんの修論研究でした。水中のウルトラファインバブルを高濃度化する技術を確立するために、さまざまな実験条件と一緒に模索しました。その過程で硬水を噴霧化してみたところ、出てきた水が白く濁っていると彼女が言いました。しばらくは、その現象が意味するところが分かりませんでした。ある時ふと視点を変えて水の硬度を調べてみたら、どうも硬水は噴霧化すると軟水になるということが分かりました。



岐阜大学教育学部
家政教育講座
久保 和弘 教授

研究成果を応用した新しい製品を開発したい

当初の目論見とは異なりましたが、この研究は、一般社団法人日本家政学会中部支部「2021年度中部支部賞（中部支部院生・学生発表奨励賞）」を受賞。また、食品科学工学の国際誌「Food Science and Technology Research」にも掲載されました。

このような経験を学生と共有でき

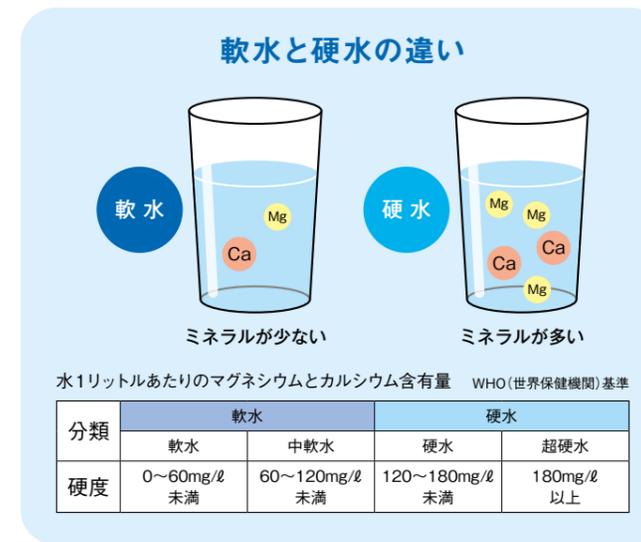
たことも本当に良かったと思います。昨今の教育現場では、生徒が自発的に課題を見つけ、それを解決する力を養う「課題解決型学習」が必要とされています。複雑化・多様化が進む現代社会においては、知識があるだけでは対処が難しいことも多くなってきており、従来の受動的な学習から能動的な学習へとシフトしています。今回の経験を通して、問題解決には知恵を絞って手を動かすことがいかに重要であるかを実感して

もらえたのではないかと思います。

今回の研究で導き出された、硬水を容易に軟化できるという発見は、人々の健康リスク低減に大きく関わります。やはり「水」は人類が生きてには欠かせないものです。まだまだ手探りではありますが、海外の展示会などで商品化の可能性を模索します。そして、噴霧化処理の詳細なメカニズムを解明し、持続可能な社会に貢献できる製品を生み出したいです。

硬水の噴霧化処理モデル

ピーカーに入れた硬水をポンプで吸い上げ、特殊な泡を生成するノズルを通して噴霧化処理を行う。これによって大量のウルトラファインバブル（極めて微小な泡）が生成され、硬水中のカルシウムイオン濃度と電気伝導度が減少することを発見した。この技術を用いて軟化した水のカルシウムイオン濃度は、EU加盟国のガイドラインの推奨範囲にほぼ相当する。



研究に携わった春見真柚さん（令和2年度大学院修了）が一般社団法人日本家政学会中部支部「2021年度中部支部賞（中部支部院生・学生発表奨励賞）」を受賞した際の様子。授賞対象となった研究テーマは「新しい硬水軟化法の開発」。





時には喧嘩もできる
仲間を作ることが大事。
意見をぶつけるからこそ
拓ける世界がある。

岐阜県農政部長
1988年 農学部農学科卒業
足立 葉子 さん

先輩の声 volume 03

農業とは無縁の幼少時代 高校の先生の勧めで農学部へ

私は岐阜県岐阜市出身で、父はエンジニア、母は薬剤師という家庭で育ち、農業とは関わりのない環境で幼少期を過ごしました。実家のすぐ近くにキャンパスがあり、岐阜大学は常に身近な存在でした。高校に入学した当初は、教育学部への進学を検討していたのですが、岐阜大学農学部出身の化学の先生から、当時注目を集めていたバイオテクノロジーの話や、農家を支援する農業改良普及員という仕事があることを聞き、実学である農学部で面白さを感じて進路を変更しました。農学部に進学したと聞いたご近所さんからは「農家じゃないのに、どうして農学部に行くの？」なんて不思議がられたものです。

入学後は、中学・高校と続けてきたバドミントン部に所属し、練習と遠征に明け暮れていました。中学時代の先輩と大学で再会するという嬉しい出来事もあり、3年次までは東海リーグの1部昇格を目指し、まさにバドミントン漬けの毎日でした。親からは「農学部に入ったのか、バドミントン部に入ったのか分からない」と言われていました。

3年後期からは、白菜とキャベツ(カンラン)を掛け合わせたバイオ野菜「ハクラン」の研究に取り組み、組



研究室では恩師をはじめ、先輩や友人にも恵まれ、活気のある楽しい日々を過ごした。

織培養の最新技術の一端に触れながら、実験や調査を経て結果を出す面白さを味わいました。私が所属する園芸学の研究室はとても人気で、30名ほどの農学科の学生のうち、毎年5~7人ほどが所属する大所帯。大学院2年生の先輩を筆頭にみんなで行動することが多く、研究も食事も活気があり、とても楽しい毎日でした。

果樹の普及員として現場へ 「ありがとう」の言葉が励みに

岐阜県庁に入庁したのは昭和63年のこと。農学職として果樹の普及指導活動を担当することになり、揖斐農業改良普及所に赴任しました。当時は女性の農業改良普及員が少なく、200名ほどの中でわずか4名。地元の農家や関係者の方と交流するため、お酒の席に参加する機会などもあり、大変でした。ただ、柿の大きさを測定して生育状況を調べるなど、自分なりに課題を見つけて計画を立て、農家の方に「ありがとう」と感謝される成果が残せた時にはやりがいを感じました。その後、県庁に異動するまで7年間ほど普及員を務めました。農業の現場の空気を肌で感じられたこと、何か物事を進める時にはキーパーソンを見つけることの大切さを学べたことは、その後の業務にもさまざまな場面で生かされています。

中学・高校と続けてきたバドミントン部に入学し、練習に遠征にと忙しい毎日。入庁後も、県の代表として全日本実業団バドミントン選手権にも出場。



担い手育成プロジェクトなど 前例のない挑戦に次々取り組む

県庁では岐阜フラワーショーの初回開催を担当しました。生産から販売まで、関係者と合意形成しながら新しいものを創り上げる業務を経験し、大きな達成感を得られました。また、10年ほど前、岐阜県の新規就農者を育成する「担い手育成プロジェクト」の立ち上げに参画したことも印象深い出来事の一つです。農家を目指す方の人生を大きく左右する事業だけに、みんなで知恵を出し合い、県が開発したポットでトマトを作る技術を活用することで、経験がなくても1年ほど研修すれば就農できる仕組みを構築。これまでを振り返ると、前例のないことへのチャレンジの連続だったと思います。

農政部長となった現在は、農業・農村の振興のため、畜産、水産、農業土木、流通販売、さらには海外輸出などにも取り組んでいます。肥料や飼料、光熱費の高騰で厳しい状況が続く中、農業に携わる皆さんが明るい気持ちで仕事に向き合える持続可能な農業を実現すること、またそれを支える県職員が自分の仕事に自信を持ち、前向きに輝ける職場を作り上げていくことを目指しています。



2005年の「愛・地球博」では、農業婦人クラブの皆さんと食育イベントを開催。

時には喧嘩ができる友人を作り 真剣に意見をぶつけ合う経験を

学生時代の経験で役に立ったのは、友人や先輩、後輩、恩師などとの人脈でしょうか。研究室では、柿の「ヘタ博士」として知られる中村三夫先生、その後赴任された福井博一先生にお世話になりましたが、福井先生には卒業後もさまざまな形で相談に乗っていただきました。また、研究室のメンバーと共にいろんな活動に取り組む中で、みんなでワイワイと意見を出し、新たなものを創り上げるプロセスを学べたことも大きな財産だと感じています。今の学生の皆さんにはこうした経験をたくさん積んでもらえたらと願っています。

単に友人を作るだけでなく、喧嘩もできる仲間を持つことが大事です。時には意見をぶつけ合い、互いの隙間を埋めていく。こうした経験を積むことが、社会に出てから必ず生きてきます。学生時代の失敗はいくらでも挽回できます。ぜひ臆することなく、いろんなことに挑戦してほしいですね。

PROFILE
岐阜市出身。岐阜大学農学部農学科を卒業。農学職として岐阜県庁に入庁し、さまざまな所属で農業振興施策に携わる。農業経営課長、農政部次長を歴任し、令和5年4月からは農政部長(現職)に就任。食料生産をはじめ、販路拡大、担い手育成、農村の維持、家畜防疫、スマート農業、農福連携など、幅広い分野を担う農政部の指揮を執る。

若年成人男性の脂肪肝と「食行動の偏り」の関連性を明らかに。早期治療を超えた早期予防につなげたい。

岐阜大学保健管理センターに所属する3人の内科医が進めている、20代の男性を対象とした脂肪肝の研究プロジェクト。今回、脂肪肝を指摘された学生の食行動の偏りに着目した調査と解析により、早期予防につながる重要な知見が得られました。



岐阜大学 保健管理センター
医学部附属病院 消化器内科
田尻下 聡子 助教

岐阜大学 保健管理センター
非常勤講師
大学院医学系研究科内科学講座
消化器内科学分野 (第一内科)
三輪 貴生 臨床助教

岐阜大学 保健管理センター センター長
医学部附属病院 糖尿病代謝内科
山本 眞由美 教授

軽視されがちな脂肪肝が、実は肝がんなどの原因に。

日本の成人男性の約3割は、肝臓の細胞内に脂肪がたまる脂肪肝になっています。体内の余った脂肪が単に肝臓に蓄えられたものかと思われがちですが、肝臓にたまった脂肪は正常な細胞を傷害して慢性肝炎、肝硬変、肝がんへと進行させていきます。脂肪肝は内臓脂肪の増加と関連深く、内臓脂肪は各種サイトカイン^{*1}を血液中に放出し、高血

圧、糖尿病、脂質異常症を誘発、動脈硬化症を進めます。ですから、脂肪肝は脳卒中や心疾患、動脈硬化症などのリスク因子として知られており、脂肪肝がある患者さんの死因の多くは循環器系疾患なのです。ところが、動脈硬化が進む前に内臓脂肪の蓄積を早く見つけ、血圧、血糖、脂質値を悪化させないようにするための特定健康診査(メタボ健診)には脂肪肝が含まれておらず、健診の対象者も40歳以上で若い世代は含まれません。3割もの成人

男性が、脂肪肝になる前に、早期発見・早期予防するためには、いつから何をすればよいかという目的で若者の脂肪肝について調査する研究プロジェクトを立ち上げました。生涯健康を目指す岐阜大学としては学生への早期介入で生涯医療費を抑え、健康寿命延伸に寄与したいと思っています。素直にアドバイスを聞き入れ、柔軟に対応できる若いうちに介入するとより有効だろうと考えるからです。慢性肝炎の主な原因は、脂肪肝と

ウイルス、アルコールの3つです。現在ではウイルス性のB型肝炎はワクチンによる予防が、C型肝炎は薬による治療が可能です。それだけに、重症になるまで自覚症状がない脂肪肝をいかに予防するかは、肝臓に携わる医学研究者の大きな使命となっています。

代謝異常を伴う脂肪肝の人は、「食行動」に偏りが。



今回の研究では2022年4月に、年齢中央値22歳の本学大学院男子学生322名を対象に、「脂肪肝性肝疾患の実態」と「食行動の偏り」との関連を調査し、相関を解析しました。脂肪肝性肝疾患の実態は、新入生の定期健康診断で血液検査に加えて、全員に腹部超音波検査を実施して診断しました。食行動の偏りとの関連は、日本肥満学会の推奨する「食行動質問表」を使用して食行動の実態を把握しました。7分類・全55の質問に答えると、分類ごとの合計点数のダイアグラムで食行動の偏りや認識のずれを可視化できるものです。

調査の結果、脂肪肝の中でも代

謝異常に関連する脂肪性肝疾患(MASLD^{*2})は、対象者の11%にありました[図1]。そして、問診表の7分類のうち「体質や体重に関する認識」の回答によってはMASLDのリスク上昇に寄与していることが判明しました[図2]。「他人よりも肥りやすい体質だと思う」「肥るのは甘いものが好きだからだと思う」などの誤った認識をしている学生に、MASLDの人が多く傾向を示したのです。また総合点数が高い、つまり食行動のくせやずれが大きいほど脂肪肝のリスクが高いことも明らかとなりました[図3]。

脂肪肝は遺伝的素因に加えて肥満症^{*4}などに関連しておこる疾患で、治療は食事・運動療法が基本ですが、さらに行動療法を加えれば治療効果が高まります。健康診断で脂肪肝の診断を受けた学生は、食行動問診表の結果から問題点を自身が把握できたことで、行動変容のきっかけを得ました。このように治療や予防のための介入において、自身が理解を深める機会があることに、この研究の大きな価値があります。現在は学部生を対象に、介入回数の違いによる予防効果の差を調査しています。

一連の研究プロジェクト^{*5}から、大学生の年代でも血液のALT値が29以上なら脂肪肝の確率が高いという知見が得られ、日本肝臓学会が「奈良宣言2023」で「健康診

断でALT値が30を超えていればかかりつけ医を受診」と呼びかけていますが、若年男性にもこの数値があてはまるものが裏付けられました。

保健管理センターは、将来、社会でリーダーとなる岐阜大学生に正しい知識と情報を選択し自己健康管理能力を獲得してもらおう使命があります。学生のみなさんには、保健管理センターを気軽に利用していただければ私たちもうれしく思います。

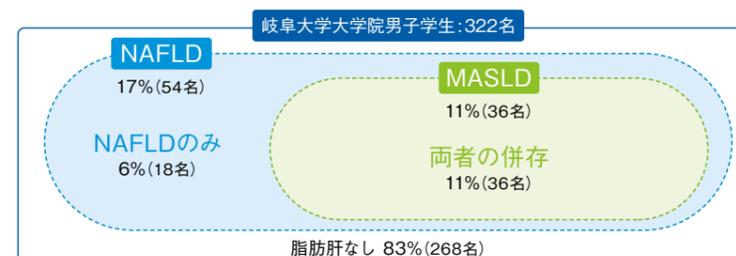
- *1 サイトカイン 主に免疫細胞から分泌される低分子のタンパク質で、細胞間の情報伝達の役割を担っている。
- *2 MASLD 代謝異常関連脂肪性肝疾患。脂肪肝に加えて「肥満」「2型糖尿病」「高血圧」「脂質異常症」のいずれかが併存することで診断する。
- *3 NAFLD 非アルコール性脂肪性肝疾患。MAFLDとともに英語名に含まれる差別的表現への配慮から、2023年、新たにMASLDが定義された。
- *4 肥満症 肥っている状態(BMIが25以上)に加え、2型糖尿病や高血圧などがある、またはそのリスクが高い疾患
- *5 Miwa T. et al. Sci Rep. 2024. 25:14(1):2194. doi: 10.1038/s41598-024-52797-8. Miwa T. et al. Hep Res. 2023. 53(8):691-700. doi: 10.1111/hepr.13906. Tajirika S. et al. Sci Rep. 2023. 18:13(1):7987. doi: 10.1038/s41598-023-34942-x.

図2 脂肪肝の有無による食行動の違い



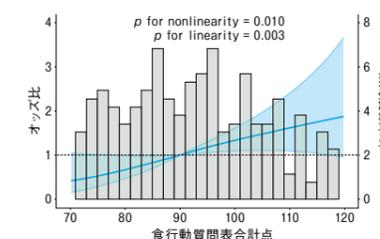
MASLDやNAFLDの人は、脂肪肝ではない人に比べて、1の「体質や体重に関する認識」、5の「食べ方」、そして合計点数が高い傾向にある。

図1 日本人若年成人男性における脂肪肝の実態



岐阜大学大学院男子学生322人を対象とした調査では、NAFLD^{*3}が17%、MASLDが11%の結果が得られた。

図3 食行動質問表合計点数と脂肪肝リスクの相関



質問表の合計点数が高いほど(右へ行くほど)、脂肪肝のリスク(オッズ比)が高いことが示された。

全ての人が多様性を認め合い 安心して過ごせる社会を目指して、 今自分ができていることをやりたいです。

地域科学部でジャーナリズムを専攻する加藤みのりさん。外出時のトイレなどで悩む重度心身障害を持つ方の話を聞いたことから、仲間とユニバーサルシートがある場所をまとめたマップを制作。ユニバーサルシートの普及に尽力するとともに、所属するゼミではドキュメンタリー映像の制作に取り組んでいます。



ゆにんくる 代表

加藤 みのり さん

岐阜大学地域科学部 地域文化学科 4年

ゆにんくる

令和5年7月に発足したボランティア団体。加藤さんをはじめ、11名の学生が所属。誰もが気軽に外出できる社会を目指して、ユニバーサルシートの普及活動などを行っている。「岐阜地区・西濃地区 ユニバーサルシート設置施設リストマップ」は、令和5年度岐阜大学学生支援プロジェクトに採択され、令和6年1月に完成。岐阜市役所や岐阜県福祉友愛アリーナなどに冊子版が設置されているほか、WEBサイトからPDF版、WEB版が利用可能。



ユニバーサルシートとは？

多目的トイレなどに設置される介助用大型ベッド。乳幼児などのおむつ交換のために設置するベビーシートとは異なり、大人も横になれる大きさ。車椅子などから乗り移りやすい高さに設置されるのが特徴。障害のある方のおむつ交換や衣服の着脱など幅広い用途で利用できる。身体が不自由な方などのニーズがあるが、設置費用が高額などの理由で普及が進んでいないことが社会問題となっている。写真は「道の駅 バレットおおの (揖斐郡大野町)」内に設置されたユニバーサルシート。



ユニバーサルシートの認知度はかなり低い。

まずは、その存在を多くの人に知ってもらえたら。

旺盛な好奇心の赴く先は
ジャーナリズムの世界でした。

高校生の頃、ジャーナリズムに興味があり、放送部に所属していました。地域科学部に進学したのは、報道の世界に明るい野原仁教授から専門的なことを学ぶため。また、特定の領域に特化せず、さまざまな学問を学べる環境は、好奇心の対象が移りやすい自分には合っていると思ったからです。

入学後、当初考えていたように幅広い領域の学問にふれられたことは良い経験でした。そして、2年生後期になって晴れて野原ゼミの一員に。現在は「インクルーシブ*1」に関する映像制作に取り組んでいます。私自身が骨形成不全症で、5歳から車いすで生活していますが、学生の頃からインクルーシブ教育、障がいの有無に関わらず一緒に学校生

活を送る教育を受けてきました。しかし、私のインクルーシブ教育は周囲の理解が乏しく、つらい思い出となっています。そんな時、親子とも私と同じ病気がながらインクルーシブの中で楽しく前向きに生活する家族の存在を知り、その日常を映像化することで、インクルーシブ教育の在り方、そして、障がいの有無で人生の幸福度が決まるわけではないことを発信したいと思いました。

ボランティア活動こそ
学生だからできることだと思う。

昨夏に学生ボランティア団体「ゆにんくる」を立ち上げ、ユニバーサルシートの普及や認知の向上に取り組んでいます。この活動を始めたきっかけは、一般的なトイレの利用が難しい重度心身障害を持つ方やそのご家族がお手洗いで悩んでいると話を聞

いたからです。そこで、仲間たちとユニバーサルシートがある場所をまとめたマップを作ることに。設置箇所の実地調査は大変でしたが、県庁や福祉施設などで配布したところ、感謝の言葉をいただいて本当にうれしかったです。また、私の思いに共感して手伝ってくれた仲間には本当に感謝しています。

卒業後は、どのような道に進むのか、選択肢がある分迷っています。ただ、家族や仲間のおかげで、小さい頃に考えていた「大きくなったら幸せになりたい」という願いは叶えられました。今、選択肢があるのも周りの支え、制度のおかげです。選択肢で悩めることに幸せを感じつつ、これからは、「多くの人が生き生きと生きられること」に貢献したいと思っています。そのために、いろいろなことにチャレンジして自分ができることを模索しながら、人生の設計図を描いていきたいです。

*1 インクルーシブ 「包摂的」「一体感」という意味で、男女、年齢、国籍、障害の有無など問わず、誰もが一緒にいられること、そういった社会を目指す言葉。



ユニバーサルシートマップを仲間と制作し、各所で配布活動を行う加藤さん。



社会システム経営学環 観光デザイン実習

地域資源を活かした観光振興策を立案。 1年半の実習を通して、観光学での学びを深める。

観光による地域づくりには、地域主導で観光客が共感しうるような地域資源の活用が重要です。また、地域の住民や企業・自治体などと協働しながら、観光に関する課題を解決し、持続可能な地域社会の構築へとつながる仕組みづくりが求められます。

そこで、観光デザイン実習では、地域の観光事業者と連携してフィールドワークを行い、実際にターゲット層を想定した持続可能な観光振興策の提案を行います。

昨年は広域な高山市において、市街地以外に観光客を誘致し、滞在時間を延ばす仕掛けを目標に、1泊2日の観光バスツアーを企画・催行しました。また、「楽しく4時間過ごそう！クーポンでお得感満載！」と題して、「見る」「食べる」「買う」「イベント（体験）」×回遊性を盛り込んだ市街地内周遊ルートも提案し、参加者に実際に楽しんでいただきました。

観光デザイン実習

対象学生：社会システム経営学環 履修期間：2年次後期～3年次後期（全50回）

地域資源の活用や地域ブランドの構築、マーケティング手法など、2年次前期までに受講した観光学での学びを、実習を通してさらに深める。観光事業者と連携して対象地域を1年かけて視察し、バスツアーを企画提案。実際にツアーの販売や運営も学生が主体となり行う。

実習は事前調査にはじまり、ツアーの企画・運営、チラシ作成、さらにクーポンを企業へ依頼したり、バスガイドの役割を担ったりと大変なこともたくさんありますが、そこで得られる学びや達成感はとても大きなもの。仲間と一緒にプロジェクトを遂行することで、コミュニケーション能力やファシリテーション能力、柔軟な対応力、判断力、察する力や共感力などの向上を実感できたはず。

1年半の実習では、学生たち自身が楽しさややりがいを感じられるこ

とはもちろん、実施にあたって協力いただいた事業者や地域の皆さまに成果をしっかりと還元することも大切にして取り組んでいます。



岐阜大学 社会システム経営学環 三井 栄 教授



岐阜大学生と一緒にオープンレッジin高山
18名の高校生が参加し、高山地域の観光や社会システム経営学環の学生とのグループワークを楽しんだ。



岐阜大学 社会システム経営学環 4年 浦 彩乃 さん

岐阜大学 社会システム経営学環 4年 船田 颯太 さん

手応えと反省点が両方あった長期の実習。 この経験を卒業研究や卒業後につなげたい。

講義のゴールは、高山を周遊する1泊2日のバスツアーを実際に販売し、自分たちでプロモーションやガイドもすること。ツアーを販売してくれた岐阜バス（岐阜乗合自動車株式会社）さんからは「大学生ならではの新しい企画を考えてほしい」と要望がありました。

まずは8名のメンバー全員で1年かけて現地をリサーチ。数回に分けて、新穂高ロープウェイや平湯温泉などの観光地を巡り、観光地としての高山の可能性を探りました。調査を通して、年配の方や外国人観光客にはしっかり訴求できていて集客につながっている反面、私たちのような若年層には魅力が伝わり切っていない一面があることが分かりました。

そこで、私たちが提案したのがターゲットを高校生に絞ったオープンレッジ。乗鞍岳や高山の古い街並みなど、代表的な観光地を周遊するとともに、学生や教員とグループワークをするプランです。この企画は岐阜大学や社会システム経営学環に興味のある高校生にとって、

一定のニーズがあると考えました。それからはグループや担当の教員と議論を重ね、岐阜バスさんからのフィードバックを受けて企画をブラッシュアップ。3年次の春休みにツアーをリリースしました。

ここで役に立ったのが、これまでに受講した「デザイン思考論」や「マネジメント活動実習」などの講義。デザインの考え方を学び、情報誌の制作をしていたため、チラシをつくる際にキャッチコピーや写真、文章をレイアウトするポイントが経験から理解できました。また、社会システム経営学環はディスカッションの機会が多く、自然とコミュニケーション能力を高められたことも大きいです。

ツアーの内容については、参加した高校生同士が楽しそうに交流してくれたり、グループワークの評判が良かったりと手応えがありました。参加者が目標人数に届かないなど宣伝活動のやり方も含めて課題が残った部分もありますが、ゼロから企画を考えて形にしたことは卒業研究や将来の仕事で生きてくると思います。

岐阜大学社会システム経営学環のカリキュラム

1年生	2年生	3年生	4年生
教養・専門基礎	専門必修	選択必修・選択	卒業研究
マネジメント活動実習 [フィールドワーク基礎]	ビジネスデザイン実習 まちづくりデザイン実習 観光デザイン実習	いずれか1つを選択 [フィールドワーク実践]	

本学の学生および修了生が各種表彰を受けました

令和5年11月3日(金)・18日(土)

岐阜大学環境サークル「G-amet」が複数の大会で賞を受賞



令和5年11月11日(土)

学生チームが「Tongaliアイデアピッチコンテスト2023」で4つのサポーター賞を受賞



令和5年11月18日(土)・19日(日)

学生チームがVR大会「IVRC2023」で複数の賞を受賞



令和5年12月16日(土)

学生チームがプログラミング作品の制作大会「技術CAMPアドバンスVol.4」で大賞を受賞



垂井町、神戸町、池田町と連携に関する協定を締結しました

令和5年12月から令和6年2月にかけて垂井町、神戸町、池田町と連携に関する協定を締結しました。この協定は、本学と各自治体が多様な分野で包括的に緊密な協力関係を築き、持続的・発展的に一層連携を深めることにより、活力ある地域社会の形成・発展および未来を担う人材育成に寄与することを目的としています。今後、本学は各自治体と連携を深め、地域創生に向けて共に取り組んでいきます。

令和5年12月12日(火)

垂井町と連携に関する協定を締結



令和6年1月22日(月)

神戸町と連携に関する協定を締結



令和6年2月13日(火)

池田町と連携に関する協定を締結



「考えようSDGs! エコ活動啓発ポスターコンクール」を開催しました

令和5年12月14日(木)

十六銀行と締結した環境保全における連携に関する覚書の一環として、SDGsについて考え、省エネ、環境美化運動やごみ減量など身近な視点から、エコ活動を啓発することを目的としたポスターコンクールを実施しました。対象は教育学部附属小中学校の児童生徒。この活動が環境について考えるきっかけとなり、エコ活動が広がっていくことを期待しています。



地域協学センター益川浩一教授が社会教育功労者表彰を受賞

令和6年2月19日(月)

社会教育功労者表彰(文部科学大臣表彰)は、地域および全国において多年にわたり社会教育の振興に功労があった者に対し、その功績をたたえるものです。本学地域協学センターの益川浩一教授は岐阜県社会教育委員の会議長を長年務めるなど、これまでの地域における社会教育振興の功労が認められ、今回の受賞となりました。



学生の提案で「丸亀シャカシャカ揚げうどん」が商品化

令和6年2月27日(火)

令和4年に開催された「第2回トリドール持続可能ビジネスコンテスト」で、社会システム経営学環の大橋菜実さんと與川美佑さん(1期生:3年生)が、食品ロス削減に向けた商品「丸亀シャカシャカ揚げうどん」を提案。令和5年2月から実現化に向けたプロジェクトがスタートし、丸亀製麺の協力を得ながら試作を重ねた商品が完成。岐阜・埼玉県内の2店舗で限定販売されました。



毛利哲也教授がAurelijus Zykas駐日リトアニア共和国特命全権大使から感謝状を授与されました

令和6年3月6日(水)

本学工学部・毛利哲也教授は長年にわたりリトアニアと日本との関係促進に尽力したことが評価され、東京で開催された「リトアニア共和国再建106周年ならびに独立回復34周年記念を祝うレセプション」において、Aurelijus Zykas駐日リトアニア共和国特命全権大使から感謝状を授与されました。本学はこれからも岐阜県が親交を結ぶ同国と一層友好な関係を構築し交流活動を推進していきます。



※駐日リトアニア共和国大使館より提供

全学共通教育棟1階多目的ホールの愛称が「IBIDEN Innovation Hub」に決まりました

令和6年4月1日(月)

イビデン株式会社とのネーミングライツ(命名権)契約に基づき、全学共通教育棟1階多目的ホールの愛称を「IBIDEN Innovation Hub」に決定しました。「多くの人にここを最大限に活用して、イノベーションを繰り返してほしい」との願いが込められた名称で、2029年3月31日までの5年間使用されます。今後はネーミングライツ事業により得た収益を活用して、学生の学修環境の整備に取り組んでまいります。



国立がん研究センターと教育・研究・医療等の包括的連携協力に関する協定を締結

令和6年2月27日(火)

本協定は、両機関の包括的な連携協力のもと、相互の機関のさらなる発展を目指し、がん領域での教育・研究・医療活動の一層の充実と質の向上を図り、学術および医療の発展と有為な人材の育成に寄与することを目的とするものです。今後、本学と国立がん研究センターは、本協定に基づき、新たな医療シーズの創出や共同研究プログラム開発の推進など、多方面で連携を進めていきます。



第1回SPARC-GIFUシンポジウムを開催しました

令和6年3月13日(水)

講堂にて「第1回SPARC-GIFUシンポジウム」を対面およびWeb同時配信で開催し、合わせて100名以上の方に参加いただきました。このシンポジウムは、ぎふ地域創生人材育成プログラム(SPARC-GIFU)を紹介するとともに、これからの展望を産官学各団体とディスカッションするために行われました。各方面から現状の課題や事業への期待などが活発に意見交換され、今後の事業推進に際してとても有意義な場となりました。



「岐大生 住んでみよう!」プロジェクトを開始し、学生が揖斐川町に住み始めました

令和6年4月1日(月)

揖斐川町においては、少子高齢化、過疎化が進み、若者の流出、人口減少、地域の衰退が課題となっています。本プロジェクトは、揖斐川町のアパートなどに学生が居住できる仕組みを創り、学習・研究環境、生活環境を整備。さらに学生が地域の活動などに参加することで地域の活性化やにぎわい創出につなげることを目的としています。4月から本学学生が揖斐川町に居住し始めました。



岐阜大学基金にご支援をお願いします。

岐阜大学基金では、多くの皆様のご協力により、学生に対する奨学金や国際交流事業、特色ある研究活動への支援、地域社会への貢献事業、キャンパス整備など教育研究活動に活用させていただきます。

皆様におかれましては、岐阜大学基金の趣旨にご賛同いただき、継続的なご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

岐阜大学基金活動による学生支援「応援奨学生」からの声

- ・この奨学金のおかげで奨学期間中、アルバイトを増やすことなく研究に集中することができました。奨学金は大学院進学にかかる費用に使わせていただきます。本当にありがとうございました。(自然科学技術研究科)
- ・奨学金の給付によって自分がやりたいことであったり、勉学への時間が大幅に増加しました。これによって、給付前と比べて確実に生活が充実したのになりました。本当にありがとうございました。(工学部)
- ・奨学生として選んでいただいたことで、勉強や研究活動に集中することができ



ました。寄附して下さった皆様に深く感謝申し上げます、卒業後は自分も本基金に貢献できるよう努めてまいります。(自然科学技術研究科)

岐阜大学基金についてのお問い合わせ先

国立大学法人東海国立大学機構岐阜大学Development Office (DO室)
〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸1番1
TEL 058-293-3276 FAX 058-293-3279
E-mail kikin@t.gifu-u.ac.jp



ご寄附のお申し込みはこちら
<https://www.gifu-u.ac.jp/fund/>

ご寄附者芳名録

令和5年10月から令和6年2月末までにご寄附いただいた方で、掲載をご了承いただいた方を五十音順にご紹介させていただきます。また、3月以降にご寄附をいただきました方につきましては、次号にて掲載させていただきます。なお、本学役職員につきましては割愛とさせていただきます。

ご寄附をいただき、心よりお礼申し上げます。

青木真奈美様	岡田実様	郡司壽幸様	嶋陸宏様	梶尾義昭様	藤代勝様	銘苅敏夫様
浅野勝己様	岡本貴志様	小池証司様	志水秀行様	築山茂様	藤森了堅様	毛利義博様
安藤隆造様	岡本基嗣様	小池正子様	志水誠男様	築山浩司様	藤森まゆみ様	森敬一様
池田紀子様	小川剛幸様	小島曾也様	居樹丸章様	出口京子様	細野久美様	森みさ子様
石川佳英様	小川剛幸様	小島孝博様	居樹丸章様	寺嶋薫様	細野久美様	守屋有人様
市川雅弥様	奥田哲司様	小島元彦様	杉江昇様	時田博明様	保土直美様	守屋康子様
市橋由成様	奥村英彦様	兒玉政七様	鈴木正嗣様	富川侑誼様	堀尾勝幸様	安田宝賢様
伊藤英比古様	尾関富彦様	兒玉玲奈様	鈴木光雄様	中尾遼太様	本田雄一様	安田美佐子様
伊藤秀久様	片桐理子様	後藤喜美子様	鈴木光雄様	中島弘義様	前澤重禮様	安田光子様
稲富美仁様	加藤順子様	後藤浩子様	妹尾紀彦様	中村友哉様	前野篤志様	安田晴一様
犬飼裕一様	加藤隆雄様	小林房代様	千藤弥生様	名和真千子様	前野智帆様	山口多朗様
井上進様	加藤隆雄様	小林勇樹様	高井賢治様	仁木俊夫様	松井みどり様	山腰美佐子様
井上武司様	金井健太郎様	小林良博様	高橋浩様	西野佳秀様	松本典芳様	山崎達男様
今井康博様	可児久典様	小見山輝人様	高橋睦様	西本昇平様	松本康様	山田規男様
今原照之様	可児光子様	小森秀明様	竹澤幸一様	根本孝彦様	三浦敏様	山田規男様
岩井宏道様	加納一宏様	近藤孝弘様	田島尚様	長谷川さや香様	三木勇鷹様	山本哲也様
岩田元様	神戸一男様	坂井茂治様	田中茂様	服部圭子様	水野智章様	山本未来様
上田元信様	北川啓介様	坂下盈彦様	田中美智子様	馬場宣芳様	水野幹雄様	吉見良太様
遠藤攝様	北島様	坂田隆様	田中美智子様	馬場紀行様	水野幹雄様	吉光明子様
遠藤攝様	北村太様	酒向三冬様	棚橋忍様	早川治彦様	三船功大様	依田忍様
大江信二様	北山則子様	佐藤彰芳様	田邊草平様	早崎鉄也様	三宅収様	若井和憲様
大野聡様	桐山綾子様	佐藤高正様	谷本晶彦様	日置雅夫様	向井加代子様	渡邊隆義様
大橋正尚様	桐山綾子様	佐藤高正様	谷本晶彦様	日置泰史様	村井独歩様	
大洞勇二郎様	久世和孝様	澤英之様	田村昌一様	樋口泰史様	村上健一様	
大町深雪様	國枝孝様	柴山崎様	築地優様	福井洸様	村松弘章様	
岡田敏嗣様	熊澤忍様		塚本吉宣様	福富敏様		

法人・団体等

(株) Alumnote	カイ インダストリーズ(株)	岐阜大学都計クラブ	名古屋教育学院
大島印刷(株)	岐阜大学工業化学 40会	(株) CMC総合研究所	萩原電気ホールディングス(株)
(株) オーテックス	岐阜大学消費生活協同組合	(医) 基生会おのレディースクリニック	ミニストップ(株)

Creating Future Life. Take it with You.

お客様とともに 快適な水まわりを創造する

株式会社 KVK

〒501-3304
岐阜県加茂郡富加町高畑字稲荷 641 番地
<https://www.kvk.co.jp/>

ミドリイロノジンセイ

～キャンパス植物まるわかりbook～

岐阜大学環境サークル G-amet が制作した キャンパス植物マップ

岐阜大学キャンパスで見ることのできる代表的な樹木 99 種類を紹介しています。

エリアマップと樹木紹介ページがリンク! この冊子を片手にキャンパス内の植物観察を楽しむことができます。

※令和4年・5年度基礎的能力を育成する学生支援プロジェクト事業 (岐阜大学教育推進・学生支援機構) の支援を受け作成しました。

岐阜大学環境サークル G-amet
<https://g-amet.mods.jp/>
問い合わせ先 gamet.gifu@gmail.com

名鉄観光

2024.8.8 THU - 8.9 FRI

旅行代金: 10,800円 (1名1室・税別)

高校生限定 一人でも友達とでも! 岐大生と一緒に オープンカレッジ in 高山

高校生×大学生 夢つくる夏 in 飛騨高山

飛騨高山ワシントンホテルプラザ

飛騨高山まちの体験交流館

地域ラボ・高山

乗鞍山麓 五色ヶ原の森

岐大生と一緒に in 高山

オープンカレッジ

岐阜大学社会システム経営学環のデザインプログラムに配属された学生が「授業：観光デザイン実習」の一環として企画・実施。観光事業者と連携しながら対象地域を1年かけて視察し、実際にバスツアーの販売や運営も学生が主体となって行います。

…… ツアーの推しPOINT! ……

- ① 大学生と話す→理想の大学生をイメージ!
- ② 岐大教授の講義→大学の学びを体験!
- ③ 岐大生が企画運営→独自の高山観光満喫!

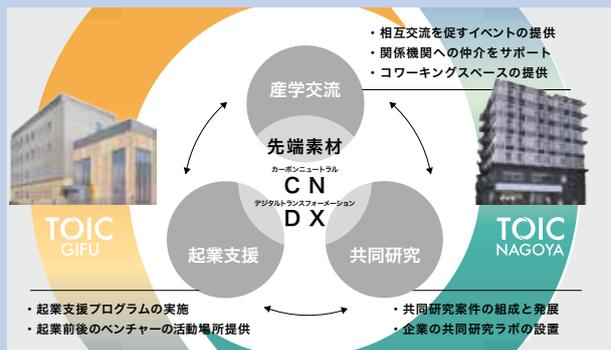
定員: 25名 (最小催行人数20名)
申込期限: 7月末 (定員になり次第受付終了)
添乗員・バスガイド: 無 付添人: 有 (岐大生)
貸切バス会社名: 名鉄観光バス or 岐阜バス
飛騨高山ワシントンホテルプラザ: 洋室、シングルorツイン

【関連記事】P18-19 ひらけ! 授業の扉

Tokai Open Innovation Complex 岐阜サイト 「OKB岐阜大学プラザ」2024年5月 グランドオープン

研究成果を東海地域から社会実装し
発展・循環する未来創りに貢献する

東海国立大学機構の研究リソースを最大限に活かし、先端素材、カーボンニュートラル、デジタルトランスフォーメーションの3重点分野を中心とした地域オープンイノベーションを実践し、TOIC岐阜サイト・TOIC名古屋サイトともに東海地域の共創の場を醸成します。



※Tokai Open Innovation Complex (TOIC) は地域の中核大学の産学融合拠点整備事業です。

国立大学法人 東海国立大学機構
Tokai Open Innovation Complex 岐阜サイト

TEL 058-293-3770 E-mail toic-g.info@t.gifu-u.ac.jp
WEB <https://toic.aip.thers.ac.jp/gifu/>

アンケートに答えて 岐阜大学オリジナルグッズを GET!!



今後のより良い誌面作りのため、皆様からのご意見やご要望をお待ちしています。岐阜大学広報誌「岐大のいぶき No.47」に添付されたアンケートハガキでアンケートにご協力いただいた方の中から、**抽選で6名様に**学生がデザインを考案した「**岐阜大学マスキングテープ(2種類)**」を進呈いたします。プレゼントをご希望の方は、アンケートハガキにお名前、ご住所、電話番号をご記入ください。

プレゼント応募締切:

令和6年12月31日(火)必着

※当選者の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。※重複での応募は無効とさせていただきます。



「岐大のいぶき」について

「いぶき」は、滋賀・岐阜県境にある伊吹(いぶき)山と生氣・活気を意味する息吹をかけて名付けられました。岐阜大学のある濃尾平野には、「伊吹おろし」と呼ばれる強い季節風が吹き込みます。これになぞらえ、本誌には、岐阜大学の活力(いぶき)を地域から世界へ感じさせたいという願いが込められています。

■発行：国立大学法人東海国立大学機構岐阜大学広報企画室

■「岐大のいぶき」についてのご意見感想をお待ちしております。

送付先 / 国立大学法人東海国立大学機構総務部広報課

〒501-1193 岐阜市柳戸1番1 TEL 058-293-2009 / 3377 FAX 058-293-2021

Email kohositu@t.gifu-u.ac.jp

岐大のいぶきは WEB からご覧いただけます!

<https://www.gifu-u.ac.jp/about/publication/publications/ibuki.html>



岐阜大学公式
X (旧 Twitter)
やっています。



こちらからアクセス!



MAKE NEW STANDARDS.
東海国立
大学機構

